

江差町 いにしえ街道

古い街並は、えてして現代の様式にはそぐわず、使いづらかったり、危険だったり。せっかくの歴史的魅力も軽減されている場合があります。平成16年11月に供用が始まった江差の「いにしえ街道」は、狭い一方通行も解消され、電線を地中化。家屋の外観も整えられたことで、快適で趣ある空間が実現しました。今、歴史散歩を楽しむ観光客が増えているようです。



函館土木現業所 江差出張所
道路係 主任

日下 和雅

道の戦略プロジェクトの一環として

新しいのに、どこか懐かしい街並。道南の江差町を訪れ、「いにしえ街道」を歩くと誰もがそう思うことでしょう。江差町は北海道の中でも早くから和人が住み始めたエリアで、いにしえ街道沿いには北海道最古の神社である姥神大神宮があり、周辺には北海道最古の木造建造物の一つである法華寺など、歴史的な寺社が現存しています。また、「江差の五月は江戸にもない」とうたわれ、北前船による檜材やニシンの交易で栄え、それに関連した産業建築物が数多く残されています。廻船問屋の旧中村家（国指定重要文化財）、横山家（道指定有形民俗文化財）などが声に出す事無く饒舌に歴史を語り、繁栄した当時の面影を今に伝える町。それが江差です。

その歴史的建造物が建ち並ぶいにしえ街道は、高台となっている「上町」地区と海岸沿いの「下町」

地区の、2階建て構造になった市街地の下町地区を南北に走る旧国道です。距離は約1.1km。現在の幹線、国道227号、228号は昭和40年代に海を埋め立てて作られました。以前のいにしえ街道は車社会を想定していない、古くからある道路ゆえ、現代のスタイルにマッチしていないという側面はぬぐい切れませんでした。確かに機能面や安全性などから判断すれば、国道227号、228号に軍配は上がるでしょう。しかし、新しい道路では決して叶うことのない、えも言われぬ趣が街道にはあり、その価値を高め、町づくりにつなげていくことが大事と判断。

北海道は昭和63年から新長期総合計画において、戦略プロジェクトを策定しましたが、その一つに「歴史を生かすまちづくり」がありました。平成元年6月、いにしえ街道一帯が「歴史を生かす街並み整備モデル地区」の指定を受け、翌平成2年11月にはモデル地区整備の基本方針である「歴史を生かす街並み整備モデル地区ガイドプラン」の提示が道から町へ。これにより、ガイドプランに基づき、具体的な整備方法、事業の検討が行われ、平成8年より街路整備を実施することになりました。

360年余り続く祭りの山車行列も、 電線なくスムーズに

いにしえ街道には課題がありました。「幅員が狭小で、車歩道の区別がないこと」及び「路線の7割が一方通行」であること。これらを解消することも含め、2つの街路事業（3・5・8号姥神津花通街路事業、3・5・9号中歌姥神通街路事業）を実施。町



道だったのを平成7年、道道江差木古内線として昇格させ、まず平成8年に「3・5・8号姥神津花通街路事業」、姥神大神宮のある姥神町から上ノ国方面へ向かう津花町までの310m区間の事業がスタート。翌平成9年には「3・5・9号中歌姥神通街路事業」、姥神町から厚沢部町方面へ向かう750m区間の事業もスタートしました。

まず、課題を克服するためには、道路幅員を13m（車道幅員7m、歩道幅員片側3m）に広げる方向へ。しかし事業区間1.1kmの間に150件もの支障物件があり、移転のための用地交渉に時間を要しました。いにしえ街道は「電線のない道路」が大きな特色ですが、電線共同溝工事は「電線は景観にふさわしくない」と、プランの途中から導入された経緯があります。本工事は姥神津花通から着手され、電線共同溝工事は平成13年度から。平成16年11月1日から全線対面通行で供用を開始しています。

平成14年度から平成16年度まで、3年間工事に携わった函館土木現業所江差出張所の日下和雅道路係主任は、いろいろご苦勞もあったようです。

「電線を地中に埋設するには、ある程度歩道の広さが必要になってきます。ところがここは片側3mしかなく、配水管や下水道管も入れ、さらに電気や電話の配線ですから、NTTさんや北電さんとは、場所確保のため、何度も協議を重ねました。また歩道上に緑色の箱、北電さんのトランスを見かけることもあるかと思いますが、通常ならば車道側に設置されるものです。ところが、いにしえ街道では歩道スペースの関係で、民地側になっています。一軒、一軒お訪ねして、説明させていただいたんですが『駐車場の邪魔になる』など、いろいろお話をまとめさせていただくのが大変でした（笑）。車道のアスファルトは脱色して灰色に、歩道は自然石の方がより街並に映えるだろうと、価格の面からも敷石は中国産の御影石を使っていますが、これも納品まで一筋縄ではいかなくて。町民の方から『やっぱり、この縁石は車の出し入れを優先してほしい』と、途中からお話をいただくこともあり、計画が急遽変更。ところが御影石は中国に発注して、船便で日本に届くまで約2ヶ月はかかり、工事の進め方にも工夫が必要でした。最も頭を痛めたのが姥神大神宮前。8月の姥神大神宮渡御祭では神社前に山車を停めるわけですが、山車の並び方が変わるようになっては大変。山車が上がれないような縁石の施工も許されま



電線の地中化により空もすっきり

せん。およそ360年も続いている伝統あるお祭りに支障をきたさないよう、配慮させていただいたつもりです」と、当時を振り返ります。

その配慮の特筆すべきものが、電線共同溝工事ともいえるでしょう。景観重視から取り入れた工事ですが、結果、山車の運行がスムーズになりました。これまでは山車が練り歩く際、電線の下を通る時は帆柱を仕舞ったり、山車が電線に引っ掛からないよう電線を持ち上げる係が乗り込んでいました。しかし、電線が埋設されたおかげで、その必要もなくなり大変好評です。

アイデア次第でさらに魅力的な道路に

道路事業に伴い、セットバックや解体、新築された家屋、店舗などは、町や地域住民の話し合いにより外観が統一され、いにしえ街道は日本の美しさと懐かしさを感じさせる、風情ある姿に生まれ変わりました。江戸時代末期に建てられた役場の旧庁舎は取り壊されましたが、柱などまだまだ使えるものは、街道沿いに新しくできた江差町会館でリサイクルされています。いにしえ街道は、平成16年6月「まちづくり功労者国土交通大臣表彰」、平成18年6月「全国街路事業コンクール特別賞」を受賞しており、朝市などのイベント会場としても親しまれています。

供用を開始してから約4年経ち「私たちは作って、お渡しするまでが仕事で、それ以降、道路を生かすのは地域に住む町民の方のアイデア次第だと思います。現在は町道に戻り、町の大切な財産。どうか、上手に活用していただきたいですね」と、道路作りへの思いを込め、話を締めくくった日下主任でした。